

私が比企谷くん相手に
苦戦するなんてまち
がっている。

ぱぶいーる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿。上手くかけるかわかりません。

八幡の事が好きな陽乃と大分男らしくなった八幡のラブコメ。

いちやいちやさせます。

R-15は保険。

目次

第1話	私は「彼」に会いに行く。	1	編	第7話	「彼」は魔王を攻略しに行く。	47	前
第2話	私は「彼」とデートする。	5	編	第8話	「彼」は魔王を攻略しに行く。	51	後
第3話	「彼」は眠れない。	13					
第4話	私は「彼」のせいで眠れない。	19					
第5話	私は「彼」との関係に1歩踏み出す。	25					
第6話	私は「彼」の看病をする。	33					
第6話	私は「彼」の看病をする。	33					
第6話	私は「彼」の看病をする。	33					

第1話 私は「彼」に会いに行く。

ひとつ深呼吸をして呼吸を整える。私はこれから大好きな「彼」に会いに行くのだ。

「ひゃっはろー」

と元気よく挨拶をして総武高校の奉仕部の部室にはいつていく。総武高校は私の母校であり、妹であるゆきのちゃんが今通っている。すると中にいた3人から返事がかえってくる。

「姉さん、何かしら。帰って頂戴。」

「げっ」

「あはは、、、どうもー」

冷たいなー3人。特にゆきのちゃん

「3人とも冷たくない!?もしかして私歓迎されてない？」

お姉さん泣いちやうぞ

？」

「雪ノ下さん、軽口はいいですから。なんか用ですか？」

比企谷くんに会えて嬉しくてにやけそうなのをこらえ、可愛らしく泣き真似をして軽

口をたたく。すると比企谷くんが目的をたずねてくる。流石、鋭い。

「いやあー比企谷に会いたくてねー ゆきのちゃん、ガハマちゃん、比企谷くんをかりていくよー？」

本当の事を少しだけ言ってみる。比企谷くんは顔を赤らめて帰ろうとする。でもここで逃がすわけにはいかない。やつぱり照れてる。かわいい。

「いや、俺今日アレがアレなんで、…。」

「よし、暇だね。」

「2人ともー、借りていいよね？」

「比企谷くんは私の所有物ではないわ。なぜ私に聞くのかしら。それと早く帰って頂戴。」

怖い。ゆきのちゃんこわい。まあ、ゆきのちゃんも比企谷くんのが好きなんだからね。負ける気はないけど。

「まあ、いいですけど。」

ガハマちゃんは嫉妬かな？ほっぺを膨らましている。かわいいな、天然恐るべし。

「俺に拒否権無いですか？ はあー、まあいいですけど。んで、どこ行くんですか。」
気だるそうにしながら素直にきいてくれる。

私はそんな彼が大好きだ。

「まあまあ、急かさない急かさないー♪」

そして私達二人は奉仕部を後にした。

「で、何するんですか？ 帰りますか？」

彼の軽口にも少し触れながらゆきのちゃんたちの前では言いにくい今日の目的を伝える。

「ナチュラルに帰宅を提案してくるところ、凄いいね（笑）そんなことより比企谷くん。今から私とデートしよっか。」

「は？」

「こんな美女とデートに行くのが嫌かな？」

「いやつ、べつ別に嫌じゃない？ ですけど、。」

「じゃあきまりだねえー」

すかさず私は彼の腕に抱きつく。

「つ、ちよつ、雪ノ下さん！ ここ学校ですよ？ 近いです離れてください。」

「照れてるー、可愛いなあ」

「うぐつ、／／／／／／　　こういう事されると勘違いしちゃいますよ？」

「勘違いじゃないかもねえ？」

「ははは、ぼっちの俺にそんな事言うのは酷ですよ。勘違いして告白して振られるまであるので、あれ？振られちゃうのかよ。」

むっ、勘違いじゃないから告白してきてくれてもいいけどなあー

しかしここで感ずかれて避けられてもこまる。

「何言ってるの？やっぱり君は面白いなー」

必死に誤魔化しながら、周りから見ればリア充爆発しろよって思われそうな会話をしながら学校をあとにした。

これから私達の放課後デートがはじまる。

第2話　私は「彼」とデートする。

突然目の前が真っ暗になり、唇に柔らかい感覚がある。彼が私にキスをしていると気づくまでにさほど時間はかからなかった。

* * * * *

「あの、早く行きましようよ。周りからの視線が痛いです。」

彼にそんなこと言われると楽しみで早く行きたいといってるのではないかと勘違いしてしまいそうだ。

「そうだね。とりあえず行こうか。その喫茶店とかどうかな？」

「ん、まあいいんじゃないですか？」

「じゃあ決まりだねー」

／＼いらっしやいませー！二名様でしょうか？／

「そうですー」

／＼あちらの席へどうぞー／

窓際の奥へ座る。

しばらくメニユを眺めていると彼が

「俺はカフェオレにしますけど雪ノ下さんはどうします?」

と訪ねてくる。

「私も同じのでもいいよー」

「注文いいですか? カフェオレ2つお願いします。」

／＼かしこまりましたー／

彼はちやつちやつとすましてしまう。しかし、相変わらず私のことは『雪ノ下さん』って呼ぶんだよなー。よし、ここで攻めてみよう。

「ねえ、比企谷くん」

「なんすか?」

「私のことは『陽乃』ってよんでよ」

「何ですか急に? 恥ずかしいから嫌です。」

むっ、強情な。適当に理由をくつつつけてみるか。

「だってさあー? ゆきのちゃんの間違えちやいそうじゃない?」

「いや、さん付けるかどうかで分かるでしょ。」

くつ、しぶとい。最終手段だ。

「八幡♡」

私は全力の甘え声、上目遣いで呼んでみる。

「私に言わせといて、自分は言わないなんてことはないよね？」

更に私は上目遣い＋涙目＋甘え声の三連コンボでせめる。

「んなつ、何いつてんですか雪ノs『陽乃』さん!？」

「まあ、試しに呼んでみてよ？」

「うう、一回だけですよ？」

やってくれるんだー。やっぱり優しいんだなあ。ここはニヤけそうなのを抑えなければ。

「陽乃／／／／……さん」

「さんはよけいだなあー？まあ呼んでくれたから今回は許してあげる。」

「今回も次回もないですから。もう無いですからね？」

「ぶー、けち」

まじでリア充爆発しろよ。って感じの会話をしたらカフェオレがなくなる。

「無くなつたし、行こうか。」

「そつすね。」

「いくらだっけ？」

私は財布をカバンから出す。

「いや、いっすよ。俺が払います。」

やさしい。

誰にでも彼が優しいのは知っている。でもそれが私だけだったらいいな。と思ってしまう。

「やさしいなあー、そういう所好きだよ。」

「はいはい。ありがとうございます。」

んなつ、本気で言ってるのに取り合ってくれない。まあそれはこれからのデートで挽回してもらおう。

—————

喫茶店をあとにして、服屋で服を彼に見てもらおう。

「この白いやつと黒いやつどっちがいいかな？」

「雪ノ下s『陽乃』、陽乃さんならどっちも似合いますよ。知りませんけど。」

一言よけいだなあー。結局陽乃って呼んでくれるのは意外だった。

彼に褒められてしまったから両方買ってしまった(笑)色違いを買うなんて。店を後にする。

「もう時間も時間ですけど、帰りますか？」

「そうだねー、もつと一緒にいたいけどボソッ」

「ん？なんか言いましたか？」

聞こえてない。よかつたあー

「ううん、何でもない。送ってつてよ」

「分かりました。」

—————

他愛もない会話をしながら2人で歩く。

家の近所に公園がある。そこによってお礼を言っておこう。

「比企谷くん。喉が渴いたなあ？」

「その公園の自販で買います？」

よかつた、早く帰って家で飲めばいいと言われなかった。

「うん。」

彼は私の分のミルクティーを自分のMAXコーヒーと一緒に買ってきた。その激甘

コーヒーは体に悪くないのかな？

「どうぞ。」

「ありがとー♪」

「今日はありがとう♪比企谷くん!」

「へっ? ああ、ありがとうございませした。」

何で驚いているのかはさておき私は彼に引っ付く。

「ちよつと、陽乃さん、離れてくださいよ。／／／／勘違いちゃいますつてば。」

「勘違いじゃないよ?」

こうしていると、自分が本当のことが好きなんだとわかる。

素直に思いを伝える。さつきみたいに相手にされないんだろうか? 少し悲しくなってしまう。

こうなったら実力行使で攻めていくしかない。

決意を決めて彼のMAXコーヒを手からとって飲む。間接キス、しちやったσ(／

／ω／／) テヘ

「ちよつと!?! 陽乃さん!?!」

「やっぱり可愛いなあー、比企谷くんは。よし、帰ろうか。」

「えっ? や、はい。そつすね。じゃあ。」

「ばいばーい」

私は彼に手を振ってその場を後にする。

すると

「陽乃さん」

呼び止められた。なんだろ？

「ん？なあに？」

振り向くと目の前が真っ暗になる。唇に柔らかい感覚がある。え？え、えええええええええ！？

私、キスされたの!?ファーストキスだよ？

「……………勘違いしたのは陽乃さんのせいですからね？」

「比企谷くん、……」

「そんじゃ、帰ります。」

「うっ、うんーじゃっ、じゃあねー」
こうして私たちのデートは終わった。

まった。仮面の中の姿を自分には見せてくれる彼女に次第に惹かれていた。

もちろん叶わぬ恋なことくらい分かっていた。

彼女は大学生。しかもあんなにも美人で、仮面とはいえ人当たりがよく可愛らしい。彼氏くらいいてもおかしくない。

それなのに、諦められなかった。本屋に行く時も無意識に彼女がいなか探したりしていた。

そんな時に彼女は奉仕部に現れ、デートに行こうと言い出した。恥ずかしいから最初は嫌がる素振りをしてみたが、やはり彼女は強引だった。まあ、うれしいからいいんだけどね。

腕に抱きつかれ、ファーストネームで呼べと言われる。自分が褒めた服を両方買ってきたり、間接キスなんかされたら理性のバケモノこと、この俺も勘違いしてしまった。しかも勘違いじゃないよ?とか言われたらキスしちゃうでしょ?いやしちゃわないか?そんなことを考えてると突然声をかけられる。

「どつたの?ごみいちゃん」

「お?小町か。おかえり。」

「ただいまー。で、どつたの?」

「いや、まあアレがアレでちよつとな、。」

小町に知られると何言われるか分からない。

男らしくなったねと、褒められるのか、それはキモイと罵倒されるのか。陽乃さんだけじゃなく、マイエンジェル小町にも嫌われたら多分シヨックで死ぬ。

つまり、ここは誤魔化すのが正解。

………
だつたはず。

だが、

こうかはいまひとつのようだ！

「はーん、お兄ちゃん、雪乃さんのお姉さんとのデートで何かあったんでしょ？まあー？

ごみいちゃんだしね？」

「ん？小町ちゃん？何でそんなこと知ってるの？」

「甘いなごみいちゃん。結衣さんと雪乃さんからメールが来てるよ。」

なぬっ?!あいつら余計なことを、、、

「まあいいや、小町は今からご飯作るから食べる時に話してよ。」

「おっ、おう。」

小町から出るちゃんと言えよ？オーラを感じてふと思う。俺は部活だけじゃなく家

でも拒否権は無いのね。帰ってこーい俺の人権ー。

この後洗いざらい話させられました。まる

「いやあーごみいちちゃん。いきなりキスはやばいつて。」

「やつぱりそうだよな。もう会えねえわ。」

「いや、そうじゃなくて、その陽乃さん？はきつとお兄ちゃんのことが好きだよ。いきなりキスなんかされたら、卒倒しちゃうよ。」

「は？」

何言ってるの？この子。

「はあ、これだからごみいちちゃんは。いいですか？女の子は嫌いな男の子をデートに誘ったりしません。あと、関節キスとか腕に抱きつくとか、有り得ない。なんで気づかないかなあ？はあ、全くごみいちちゃんは。」

ん？今これだからごみいちちゃんは。的なこと2回言われたよね？大事だから2回言ったの？そうなの？小町ちゃん？お兄ちゃん泣いちゃうよ？

が、しかし、小町が言っていることが本当ならば、それほど嬉しいことは無い。

「そうならいんだけどな。とりあえず今日は疲れた。風呂入ってねるわ。ちよつと話して気が楽になったわ。ありがとな」

小町は受験生。流石にこれ以上時間を割くわけには行かない。ここで会話を切っておくことにした。

「いえいえー。」

—————

風呂上がり。俺の暇つぶし機能付き目覚まし時計こと、スマホが点滅している事に気づく。

自室に入りベットのうえでメールボックスを開いてみる。新着メール3件。陽乃さんと雪ノ下と、ん？最後のスパムかな？

……………あ、由比ヶ浜でした。

雪ノ下陽乃

—————

今日はありがとう！楽しかったよ♡

また行こうね、八幡！

—————
I E N D I

雪ノ下雪乃

—————

部活をすっぽかして姉さんとデートとはいいい度胸ね。明日は覚悟して登校してきなさい。

—————

☆★ゆい★☆☆

—————

ゆきのんと私をほったらかしてデートとかずるいし！、（；；）ノ
今度私ともデートしてよね！

—————

とりあえず陽乃さん嫌がって無いことには安心したが、唇に残った感覚のせいで眠れず、気づけば次の日の朝を迎えていた。

第4話 私は「彼」のせいで眠れない。

陽乃 side

先程公園で彼にキスをされた。衝撃的すぎてじゃあねとあいさつしてから30分くらいずっと公園のベンチでぼーっとしていた。

流石に遅すぎると母に何を言われるか分からないのでとりあえず帰ることにした。

ガチャ「ただいまー」

「おかえり。陽乃。遅かったわね。」

「うん、まあちよつとねー」

「そう、お風呂わいてるわよ。」

「わかった。入ってくるね。」

—————

お風呂から上がった私はずっと部屋のベットの上で悶えている。顔が熱い気がする。の長風呂したせいだよな？うん。そうに決まっている……と言いたいところだけど、彼のせいだ！突然キスとか！卒倒する所だったじゃない！

心の準備とかあるんだからね!? 嬉しかったけど。

「こういう時ってお礼のメールとかした方がいいのかなあー?」
私は一人つぶやく。

とりあえず送ることにしよう。

なんて送ろうかなあ、、

ーーーーー

比企谷くん!

責任、とつてね♡

うん。ちよつと引かれそうだからやめとこう。

ーーーーー

比企谷くん♡

また行こうね (≡▽≡)

お礼になつてないじゃん。却下。

くああああ!! なんて打てばいいんだア!!

普段ならメールごときでこんなに迷うことなんてないのに!

突然キスなんかするから!

.....

恥ずかしくなってきた。

—————

今日はありがとう！楽しかったよ♡

また行こうね、比企谷くん！

これでいいや。

ええい！送信

よし、おっけい

♡とか重かったかなあ？

引かれたらどうしよう。、、彼に拒絶されたらショックで死ぬかも。悲しくなってきた

そう。考えるのやめよう。

ピロリン

ん？メール？もしかして彼から!?早くない？

ドキドキしながら通知を確認する。

ゆきのちゃん

—————

姉さん、うちの部員を勝手に連れ去らないでくれるかしら。

ん？ゆきのちゃん確か借りてくねって言った時いいって言ったよね？

勝手じゃないよね、。

とりあえず返信しなくちや。

—————

ゆきのちゃん確かいよいよっていったよね？

もしかして私が比企谷くんとデートしたことに對して嫉妬してるのー？

よし。送信

ゆきのちゃん

—————

姉さん、冗談は辞めてちょうだい。私があの男相手に嫉妬なんてする訳がないじゃない。
い。

というか、デートしたのね。

ケダモノに何かされなかったのかしら？

気をつけることね。

あ、デートとか余計なことを言っちゃったかもなー。ていうか比企谷くんはケダモノ
なんかじゃないし。

—————

何も無かったし比企谷は優しかったよー

それじゃ、おやすみ。

何も無かったと言えば嘘になるが、ここでキスしたなんて言ったら比企谷君がどうなる事やら、

ゆきのちゃん

—————

おやすみなさい。

さて、寝ようかなー

………寝れない。目をつぶる度に彼の優しい口付けを思い出してしまう。どうしよう。

一人ベットの上で照れていると朝になっていた。

そのせいか、その日の講義は半分くらいは寝て、半分はぼーっとしていた。

早く彼に会いたい。

私は気づけば四六時中彼のことを考えている。

私がいなくなったらのは彼のせいだ。

私は一人でそんな事を考えながら再び総武高校への道を歩いていた。

第5話 私は「彼」との関係に1歩踏み出す。

八幡side

ふああ、ねみい。

眠れなかったせいで眠い。

いつもは寝た振りなのだが、今日は違う。割とガチでねている。

「……………まん」

「……………ちまん」

「はちまんー！」

ん？天使の声が聞こえる。

そうか学校か、ここ。

「おおお、近い近い！」

「おお、マイエンジェル、どーした。」

「エ、エンジェル？」

「おつといけねえ、口が滑つちやっただぜ。」

「いや、なんでもない。で、どーした。」

「あつ、そうそう、もうお昼だよ？はちまんずつと寝てたから、ね。」

「お？そうなのか。購買にでも行ってくるかな。」

「戸塚は部活ないの？」

「いや、今から行くんだー」

「なんだよ。せっかくマイエンジェル戸塚とランチタイムを過ごそうと思ったのに。」

「そうか。じゃあ、頑張れよ。」

「うんっ、ありがとう！」

「戸塚に手を振って教室を後にする。」

さて、購買行くか。

購買で焼きそばパンを買い、自販機でソウルドリンク、MAXコーヒーを買う。

MAXコーヒーを見ると恥ずかしくなってくるのは気のせいだ。多分。

ベストプライスで昼食をとり、うとうとしているうちにまた眠りにつく。

ふう、よく寝たぜ。五限目が現国だった気がするけどまあいいや。もう放課後じゃん。

部活行きたくねえなあー。

怖いもん。雪ノ下。

「よっ、よお。」

「あら、来たのね。クズガヤくん。」

「ひつきーきたんだ、、。」

はいー。しよっぱなから御褒美頂きました。はい。

「さて、どういうことかしら？」

「ちゃんと説明してよ、ひつきー」

いや、怖いから。由比ヶ浜さん？あなた目の光が消えてヤンデレみないになってるよ？

「昨日はまあ、な、いや。何も無かった。」

正直にキスをしました！とか言ったら多分やばいよね。

「まず、デート行ったというのは本当かしら？」

これに関してはもうバレている。誤魔化すと余計ひどいことになりそうなので認めよう。

「ああ、そうだ。」

「そう。貴方は姉さんの事が好きなのかしら？」

うっわ、そんなにストレートに聞いちやいます？

どうすべきなのだろうか、うーん。

陽乃さーんどうしましょう、っべーわー。

「……………」

「ヒッキー、どうなの？」

俺が陽乃さんの事が好きなのは紛れもない事実だ。

ここで隠したところで、いずれバレるのだろう。

俺は覚悟を決めた。

「そうだ。俺は陽乃さんが好きだ。」

割と大きい声だった気がする。

ここで本心を言うなんてがらにもないな。

これでこいつらとの関係も終わりか、。

俺は一人で少し悲しんでいた。

教室の外で俺の発言を聞き、悶えている人がいるとも知らずに。

—————

陽乃 side

「俺は陽乃さんが好きだ。」

彼に会いに奉仕部に来たところで彼の発言に顔がみるみる赤くなっていく気がする。

好き!?!はるのさん!?!わたし?

えっちよつとどーしてそんなのゆきのちゃんたちの前で言っちゃうの?

やばい恥ずかしい。ていうか彼カッコよすぎでしょ!「俺は陽乃さんが好きだ。」とか

惚れてまうやろ! あ、もう惚れてました。

ものすごーく恥ずかしいけど、ゆきのちゃんたちの反応が気になるのもう一度聞き

耳を立てる。

「そう、本気なのね?」

「ああ。」

「ならいいわ。姉さんをよろしくね、義兄さん。」

ふええええ!!義兄さん!!気が早いよ!

ゆきのちゃん!私と比企谷くんがけつ、結婚なんて!

「気がはえーよ。」

「ふふつ、そうね。」

「ヒツキー、本気、なんだ、。」

..... 私ね、入学式の時にサブレを助けてもらった時からヒツキーのことが好きだよ。だから凄く悔しいけど、私はヒツキーが幸せならそれでいいの。頑張つてねヒツキー。」

「由比ヶ浜、。。。すまん。ありがとう。」

ガハマちゃん、私が比企谷くんを幸せにします!

そんな事を考えていると後ろから突然声をかけられる。

「陽乃?何をしているんだ?」

室内からも

「姉さん?」とか「陽乃さん?」とか聞こえてくる。

やばい。ばれた。

室内の会話に聞き耳を立てていて背後の気配に気づかなかった。静ちゃん？あなたはジンですか？

「しっ、静ちゃんかあー、びつくりしたー

みんな、ひやつ、ひやつはろー」

「姉（陽乃）さん、いつから聞いていたのかしら（んすか？）？」

「俺は好きだ。当たり前くらいから、。。。」

みるみる彼の顔が赤くなる。かわいい。

その一方静ちゃんの頭の上にはハテナマークが浮いている。

「好き？比企谷、何のことだ？」

「先生（静ちゃん）には関係ないです。（ありません）（ないよ。）（ないっすよ。）」

4人にそう言われ静ちゃんは少ししゅんとしていた。

「そう言えば今日は会議があつた気がするなー

、。私ここで失礼するよ。」

静ちゃんは気まづくなつたのか職員室に帰っていく。

しかしそんなことを気にしている場合ではない。

「ゆきのちゃん、ガハマちゃん、いいの？」

「構わないわ。」

「ヒツキーが幸せなら私はそれでいいんです。」

「2人とも優しいんだね。私は頑張るよ。」

「陽乃さん!?!それって、その、えっと……そういう意味ですか?」

「ここで告白することになるとは思わなかったけど、こんなシユチュエーション滅多にないもんね? 不可抗力。」

「うん。そうだよ。私も比企谷くんが好き。」

「陽乃さん……。俺も陽乃さんが好きです。付き合ってください。」

私はそつとキスをした。ゆきのちゃんたちが一瞬驚いたような顔をしていたが、すぐに微笑んでいた。

長い口付け。私はこんな時間がずっと続けばいいのにといい、名残惜しいのを我慢して口を離す。

「よろこんで!こちらこそよろしくね!」

こうして私達は晴れて恋人同士となった。

第6話 私は「彼」の看病をする。

八幡side

陽乃さんと付き合い初めて早くも1週間。

色々なことがありました。

デートしたりデートしたりデートしたり。

あれ？デートしてばっかじゃない？まあいいや。

そして俺は今風邪を引いております。

朝起きて学校へ行こうとしたものの、玄関でぶっ倒れて家で寝ております。

「……………暇だ。」

暇ですよ。何もすることない。薬飲んだけど熱下がらないからゲームする気力もない。1日中寝てる。まあそれもありがたかな。

もう一眠りするか。

—————

起きたら18時。割といい時間。そろそろ小町が帰ってくるかな？

小町か陽乃さんみたら風邪とか1発で治りそう。誰ですかシスコンとか言った人は。出てきなさい。

「ただいまー」

「おう、小町、おかえり。」

「どったの？目がいつも以上に腐ってるし。風邪？」

小町は今日、先に行っていたので俺がぶつ倒れたことは知らない。

「まあな。」

「なら寝てなよ。小町、今から友達と勉強会しようと思ってただけど、断つとくね。」

「いや、いいぞ、心配すんな。行ってこいよ。」

小町に迷惑はかけたくない。

「ありがとうーお兄ちゃん！愛してるよ！

あつ、今の小町的にポイント高い！」

「へいへい。」

最後のが無ければなあー

「じゃあ、いつてきまーす。」

小町が家を出てまた静かになる。

うん、暇だ。

ピンポン

小町か？忘れ物かな？

ガチャ

「小町ー、鍵なら空いてるぞ。つて、え？」

「えへへ、来ちゃった♡風邪引いたんでしょ？」

扉を開けると予想外の人物、陽乃さんがいた。

「陽乃さんにうつしちやいますよ？」

「いいのいいのー。私、比企谷くんのだったらうつされてもいいよー」

なんかゾクツとした。何かに目覚めそうでした。まる。

「と言うか何で知ってたんですか？」

「あー、小町ちゃんにさつき聞いたの。そしたらごみいちゃんをよろしくです！義姉さん！って言われたから来たの。」

義姉さんってまだ気が早いよ。小町ちゃん。

「そうですか、すいませんね。」

「いいのよー、それじゃ、イチヤイチヤしよつか♪じゃなかった、ご飯作るから寝ててよ。」

「ういっす。」

—————

コトつ卵がゆが置かれる。超いい匂い。ご飯もだけど陽乃さんも。

「はい、どーぞ。」

「いただきます。」

スプーンをしようとした手を止められる。

「はい、あーん♡」

「ちよつと！陽乃さん！」

「いやなの？」

ウルウル上目遣い＋甘え声。くぁーずるい。

「嫌なわけ無いでしょ。」

うっめえー!!!

何これ、やばい。店のよりうまいんじやね？

「うまいです！流石つすね。」

「いやー、よかったあー」

—————

すぐに完食してしまう。

飯食ったら眠くなってきた。

「眠い?」

「え?あ、まあ。」

「そっか。はいどーぞ」

そう言うのと陽乃さんは自分の膝の上に俺の頭を乗せる。

柔らかい。あつたかい。いい匂い。

すぐく、安心できる香りだった。

そこから俺が寝るまでにそんなに時間はかからなかった。

「可愛いな、比企谷くん。」

そして夜は更けていく。

第6・5話　私は「彼」の看病をする。　続

八幡side

「ただいまー!」

元気の良い小町の声で目が覚める。

もう全然だるくない。もう元気!はちまんげんき!

……あれ?陽乃さんが俺に抱きついて寝てるんだけど?あれ?確か、えつと、
そうでした。膝枕してもらって寝てたんです。いつの間にか陽乃さんも寝てし
まったらしい。

おいおい、色々当たっててやばいし。ってかやばくね?小町帰ってきたよ?ふええ、
どうしよう。

と思った時にはもう遅い。

「はああ!？」

「ちよつ、ちよつ、ごみいちゃん!なんで寝てる陽乃さんと抱き合ってるの!？」

……………小町、お兄ちゃんは流石に犯罪は犯さないと思ってたよ。」

すんげえ悲しそうな顔して携帯を取り出す小町。

「おい、まてまて、お兄ちゃん犯罪は犯してないぞ。とりあえず携帯をしまえ。」

小町、半泣きじゃん。俺のダメージが大きいから辞めてね。それ。

「陽乃さん、起きてください。」

「んくう、ん?比企谷くん、おはよう。」

「もうだいぶこんばんはですけどね。」

「陽乃さん!ごみいちゃんになにかされませんでしたか!？」

「ううん、何もされてないよ?ちよつと期待してたけどやっぱり比企谷くんはチキンだねえー?」

さらつとからかう陽乃さん。

なんせ理性の化け物ですからね！

「理性の化け物なだけです。」

「ふふつ、そうだね。」

「そうですか、ごみいちゃんが犯罪を犯さないで良かったです。」

「それでは、義姉ちゃん、ごみいちゃん、ごゆつくりー。小町は部屋で勉強をします。」

「うん。ありがとう、小町ちゃん。」

「じゃあ、比企谷くん。君の部屋で続きをしようか？」

「なんですか続きつて。そういうのはまた今度にしましょうよ。小町いますし。親も

帰ってきますよ?。」

「あーそれはそうだね。じゃあ、イチャイチャしようか。」

「まあそんならいなら。」

「素直じゃないなあー?。」

ぐつ、近い。可愛い。

おりやつ。

ちよつとキスを試してみる。可愛いなホントに。

「んっ。ぷはあ。」

かああーつて音が聞こえそうなくらい陽乃さんが赤くなる。

「急にキスしてくるなんて! どうしたの?」

「理性の化物も天使には敵いませんでした。」

「きやつ、天使つて!! もう。」

可愛いですよ。ホントに。

「比企谷くん、今日は泊まっていいかな?」

「何言つてんですか? 親が帰つてきますよ?」

「いいじゃない。ご挨拶しとくよー? 小町ちゃんがもう言つてくれてるみたいだし?」

まじか小町。ナイス。

よくやった。

つておい、なんて言つたんだよ。

「そうですか。なら風呂入っちゃつてくださいよ。」

「比企谷くん、一緒に入ろ♡」

「流石にそれはまずいですよ。」

「もう1回ちゅーしてくれるなら許したげる。」

「はあー。」

陽乃さんの唇にキスをする。

「よし、じゃあ、お先にー。」

—————

「お先ー」

陽乃さんが出てくる。着替えを持ってきている時点でもう泊まる気満々だということとがわかる。

先に言っておこう。この人すっぴんもマジで綺麗だわ。

そこらのモデルとかとは比べ物にならないレベル。

よく女子の濡れた髪に萌える男子っているじゃん？

俺ぼっちだからよく分かんなかったけど、今わかったわ。

濡れた髪のかわいい女の子は神。

つまり濡れ髪はるのんは神。

「はい。俺入ってくるんで、そこらでくつろいどいてください。」

そう言つて風呂場に向かう。

「比企谷くんが私が入ったあとの残り湯で何をやろうと、私は嫌いにはならないよ！」

「俺のことなんだと思ってるんですかね？そこまで変態じゃないです。」

ちよつと悲しかったので思いっきりむすつとしてみる。

「もうつ、冗談だよー」

—————

「ぶはあーうめえ、風呂上がりのマツ缶は格別だぜ！」

「うええ、甘い。」

「こんなの糖尿病になっちゃうよ？」

「もう遅いですよ」

もうマツ缶飲み始めてだいぶたつし、今更な気がする。

「さて、そろそろ遅いので寝ましようか。俺はソファーで寝るので適当に俺のベット使ってください。」

「は？」

怖いよ。こわいよはるのん。は？つて声が凍てついてるもん。なんかまずいこと

言った？

「怖いですよ？なんですかは？つて。」

「いやいや、普通一緒に寝るでしょ？」

「普通？ですか。なんせプロのぼつちですからリア充の普通はよく分かりません。」

「とにかく一緒に寝るの！それとも私と寝るのがいや？」

「別に嫌じゃないですけど、。。。」

「なら決まりねー。」

「さつきもう既に寝ちやってますけどね。」

「尚更いいじゃない？こんな可愛いお姉さんと寝れるなんて比企谷くんだけだよー？」

男は『ただだよ？』つという言葉に弱い。自覚がある。

もちろん俺にも効くよ！

「さいですか。さつきと寝ましょ。」

「うん！大好きー！」

その後結局色々当たったりしてあんまり眠れませんでした。

風邪で1日中寝てたから元気なんだけどね。

特に八幡の八幡とかね。うん。

第7話 「彼」は魔王を攻略しに行く。前編

「ねえ比企谷くん。」

「なんすか?」

「私はこの前比企谷くんの親御さんに挨拶したよね?」

「え?あ、そうですね。」

そうなのである。この人は俺が風邪ひいて寝込んでるところにお世話しに来てくれて、流れで泊まることになっちやってですね、、、。

泊まったからには親とも顔合わせしてる訳である。早速「比企谷くんの嫁の」とか爆弾落とすし、、、。まあ親には気に入られてたみたいだからよかったよ。俺がめっちゃ質問されたけどね。まる。

「それがどうかしましたか?」

「でね、比企谷くん。私が君のお家に行ったわけだからね、家の母親にも会って欲しいの。」

「はああ!?!怖いですよ。」

「……………そっか。そうだよね。」

すげえ悲しそうな顔してんな。

「わかりましたよ！行きますよ。」

そう言うのとすぐににこぱーっと笑顔になる陽乃さん。（可愛い）

つても怖えな。こんなの腐り目が行って大丈夫なのん？」

「大丈夫だよ。多分。きつと。」

おっと、声に出しちまったぜ。

「全然大丈夫じゃ無さそうな返事ですね……。」

「まあいいですけど。」

「よし、じゃあ行こうか。」

「え？今からですか!？」

「え?。」

逆になんで今じゃないの？的な視線を向けられる。心の準備がア……

—————

結局グイグイ引つ張られて雪ノ下宅玄関前。

デカイ。もうでかいよ家が。イエエエガアアアー!!!!

怖すぎて駆逐するところだったぜ。つて、何をだよ。

一人でノリツツコミして気分を落ち着かせる。

.....はずだった。全然効果ないし。

「どしたの比企谷くん？」

どしたのじゃないですよ、やばいですよ。特に家から出るオーラのなの。

「いや、デケエ家だなーと。」

「ふふ、そうかもね。よし、入ろっか。」

おいおい、まてまてまて、まだ心の準備ができt...

「だだいまー、旦那連れてきたよー!」

ぐっはあ!!吐血するわ!

家に来た時と言いなに?はるのん俺との関係に爆弾おとしまくってね!?

「おかえりなさい、陽乃。で、.....旦那?」

「どうも。陽乃さんとお付き合いをさせて頂いています。比企谷八幡と申します。」

「へえ、あなたが比企谷さんね。」

ゴゴゴゴゴゴゴってオーラが出てる。ままのんやばい。笑ってんだけど目が笑ってない。

こいつが？的なこと考えてそう。

「そうそう、雪乃ちゃんの事いろいろ助けてくれたりした子だよー。雪乃ちゃんが告白しないから先に貰っちゃった、。」

「どうも。どちらの娘さんにもお世話になっております。」

さつきからお世話になっております。ばつか言ってる気がする。

「そう。まあいいわ、あがつてちようだい。リビングはこつちよ。」

「はい。お邪魔します。それにしてもすごく広いお家ですね。」

『割と』広いのかしらね。」

おお、これが割となのかよ。すげえな金持ち。

にしてもさつきから怖いよ。

絶対嫌われてんじゃん。

修羅場の予感がする。

寿命が縮まるわ。マジで。

第8話 「彼」は魔王を攻略しに行く。後編

手汗ヤバイ。汗もやばい。帰りたいたい。家具がすごい。家がでかい。ままのん怖い。

そうです。俺は陽乃さんの提案で雪ノ下家に来ております。さつき来たばかりだけどさ、絶対ままのん俺のこと嫌いだよね？やだ怖い。八幡死んじゃうう！

「さて、比企谷さん。座ってちょうだい。」

「ひゃっ、はい。」

噛んだああアアアアア!!!うわあああ!

死にたい死にたい死にたいー!!

バーカバーカ八幡!八幡!

「まずね、事故のことを謝りたいの。すみませんでした。」

おお、テンパって完全に自分の名前を悪口として使ってたじゃないか!

だっせー。

「そんな、とんでもない。あれは飛び込んだ俺が悪いですよ。」

「犬の命のために自らを犠牲にするなんて普通にはできないことだわ。あなたがしたことはもって誇りを持ってもいいことよ?」

「はは、犬を助けた以前にこんな人間なので。こんなゾンビみたいなのが自分に自信持ってたら気持ち悪いですよ。」

「ふふ、面白い人ね。」

お？全然怖くねえな。

「……で、旦那とはどういう事かしら？」

と思った俺が間違いました。

やっぱ怖い。ほんとに怖い。

氷の女王ことゆきのんを最終強化した時みたいな感じかな。視線が突き刺さってくる。

「あはは、お母さん。比企谷くんまだ高校生だよ？流石に旦那は冗談だつて。まあ私は比企谷くんと結婚したいけど。ボソツ」

最後の方がよく聞こえなかったけど、陽乃さんもフォローしてくれる。

「そう。にしてもよ。彼氏？そんなはずないわ。陽乃にはお見合いの相手が山ほどいるのよ。」

「……なにそれ？初耳。でも私は比企谷くんが好きだから。断つといてよ。」

「何を言っているの？あなたは雪ノ下家の長女なのよ？」
なんかどつちもイライラしてらっしゃる。

「…………… それ以前に私は一人の人間だよ？」

「そんな事は分かつてるわよ。私はあなたの幸せを願って……………」

「…………… 本気で言ってるの？好きな相手と別れて興味もないただの金持ちの息子と結婚するのが本当に私の幸せだと思ってるの？」

「ええ。そうよ。」

「そう。もういいよ。」

そう言つて陽乃さんは泣きながら走つて部屋を出ていく。

「あの、すみません。俺は陽乃さんを追いかけます。」

「…………… あんな事を言つた相手によく話しかけられるわね。陽乃が怒るのは当然だわ。追いかけてちょうだい。でもね、比企谷さん。私はあなたとは別れてお見合いで決めた相手と結婚する方が陽乃の幸せだと思つているわ。」

「そうですか。お邪魔しました。」

—————

そう言つて俺は陽乃さんを追いかける。

最初に俺がキスをした公園で陽乃さんを見つけた。

「陽乃さん。」

「比企谷くん。」

「ごめんね。あんな所を見せちゃって。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。」

「そう。」

「私さ、最近、何で雪ノ下家に生まれたんだろって思っちゃうんだ。」

「俺も思いますよ。こんなのが兄なんて、小町が可哀想だな。とか。」

「ふふ、君はやっぱリシスコンだね。」

「ちゃんと笑ってくれた。よかった。」

「当たり前です。」

「そうなのかなー?」

「ええ。」

「……………俺は陽乃さんが幸せになれるなら俺と別れるのもありだと思いますよ。」

「何でそんなこと言うの?」

「俺だってこんなこと言いたくありません。陽乃さんが大好きです。けど、お母さんの

言うことも分かるんです。」

「私は、私は、比企谷くんとずっと一緒にいたいのに！別れるなんて嫌だよ……」

「そうですか。僕もですよ。」

そう言つて陽乃さんを抱きしめる。

「もう一度、話つけに行きましよう。」

「うん。」

「まず、俺が少し話したいので、行つてきていいですか？」

「……？いいよ。」

—————

「あら比企谷さん。どうかしたのかしら？」

「いえ、少しお話しませんか？」

「ええ。構わないわ。」

緊張するけど、これは陽乃さんのためであり、自分ため。

頑張れ、比企谷八幡!!

「雪ノ下さん、まず言つておきたいことがあります。俺は陽乃さんが好きです。世界中の誰よりも彼女を愛しています。どうか、お願いします。陽乃さんを泣かせないでください。俺は、俺は彼女の隣にいたいんです。」

柄にもないセリフだな。くせえわ。

でも本心だからなー。

「そう。私はね、親の決めた相手と結婚したの。それでも、幸せだったし、今も幸せよ。あの人はいい人だし、娘2人も立派になった。私は誰かを本気で好きになったことがなかった。だから文句も言わずに結婚したんだと思うわ。」

「……でもね、泣いている陽乃を見て気づいたわ。本当の幸せは自分の好きな相手と結ばれることだって。あなた達2人を引き裂くつもりなんてないわ。お見合いも断りましょう。」

後であの人に言うておくわ。」

「いいんですか？そんな簡単に。」

「いいのよ。いつだっかしらね、陽乃がすごく機嫌よく帰ってきたことがあったの。気になったから別の日に少し陽乃を付けてみたらあなたと2人で楽しそうに歩いているのを見つけたわ。」

あんな陽乃の笑顔は初めて見たわ。いつもの仮面ではない、本心からの笑顔。陽乃は大層幸せでしょうね。」

「え、？見てたんですか？」

「ふふ、キスをしたのを見たわよ。」

「……あの、俺、消されたりしませんよね？」

「当たり前じゃない！もう、。ふふ。」

そう言つてままのんはとても柔らかく微笑んでいた。

その時俺は、この人の笑顔を美しいと感じた。娘を思う母親の笑顔を。

「陽乃はどこにいるのかしら？謝つておきたいの。」

「今から連れてきます。」

「そう。ありがとう。」

—————

俺は陽乃さんを連れて雪ノ下家に戻つてきた。

「陽乃…… さつきはごめんなさいね。お見合いは断つておくわ。」

「私こそごめんなさい。でも、いいの？」

「ええ。私はあなたが幸せなのが一番よ。あなたは比企谷さんという時が一番幸せそう

だから、それが正解だと思つて。」

「ありがとう。お母さん。」

陽乃さんは涙を流しながらそういつた。

「あなたは私の娘なんだから、自信を持ちなさい。」

「はい！お母さん。」

「それと比企谷さん。陽乃をよろしくお願いしますね。と言つてもまだ高校生だからこれからも仲良くしてやってくださいね。」

「ええ、もちろん。こちらこそお願いします。」

「今日は突然押しかけてすみませんでした。」

「いいのよ、陽乃と話をするきっかけにもなったし。泊まっていけばいいのに。」

「はは、それはまたの機会に。」

「そうね。」

「お邪魔しました。」

「ばいばーい！比企谷くん！」

「また会いましょうね、比企谷さん。」

結局ままのんはいいひとだった。

ままのんというデケエ壁を超えた安心と疲れから遅めの足取りで家路についた。

これからも陽乃さんとはいちゃいちゃできるようだ。